

序

～第2版の発行に寄せて～

運動学がリハビリテーションの根幹をなす科目であることは、衆目の一致するところであろう。しかし、物理学や解剖学、生理学など多岐にわたる知識が必要とされるため、苦手意識をもっている学生も多い。さらに教える側も、運動学全般にわたって精通している教員ばかりとはいえない。「運動学」というワードが入った書籍は多々みられるし、これまでに分担執筆をさせていただいたこともある。しかしそれらをもってなお、養成校の教員と話をする、テキストに加えて追加資料を配布している、名著ではあるがどう教えていいかわからないといった意見を耳にすることが多い。さらには、臨床現場に出てからこそ必要とされる運動学の知識であるにもかかわらず、若手セラピストには養成校で学んだ情報を確認、あるいは更新する機会がない現状を目にしてきた。このような状況であるにもかかわらず、打開策がみえず手をこまねいていた。

そのようななか、第1版出版に向けて動き出した。運動学の最新知見を含めて実践の文脈上で語る、つまりPT・OT養成に必要な運動学の集大成は大変だった。医学・工学を含めた広義の自然科学の発展に伴い、運動学の内容はブラッシュアップされている。しかし、PT・OTに必要な運動学の全体像を捉えられているセラピストは少ない。ここには、運動学は難しい、苦手だという思い込みも少なからず影響しているように思われる。本書の章立ては、私自身が学生向けに講義している「運動学」の内容をベースに、エッセンスを網羅することにした。これまでは他の書籍を教科書指定していたのだが、その内容のすべてを教えられたわけではない。時間的な制約はもちろん、内容が難解であることも大きな理由であった。そのため第1版の執筆に際しては、運動器の基本から姿勢・歩行まで、運動学の重要ワードをカバーしつつも、必要以上の知識は省き、できるだけコンパクトにまとめることを意識した。また、カラーのイラストや写真を多用することで、ビジュアル面でも学びやすくなるよう工夫した。さらには解剖学書を並べて見なくても済むよう、筋の図など巻末付録も充実させた。本書は養成校での講義用テキストとしての使用を想定しているが、現職のセラピストが運動学の知識を振り返るための書籍としても有用なはずである。

さて、第1版が発行されて2年が経過し、第2刷発行の予定であることを羊土社編集部より2021年10月末に連絡いただいた。編集部としては、すでに判明している誤植の修正確認のつもりであったと思われるが、私がやっかない返信をしてしまったのである。というのも、2022年4月改訂の「関節可動域表示ならびに測定法」の内容を踏まえた修正依頼を提案したからである。

日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会（1995）による足関節および足

部における運動の定義が広く使用されているが、英語圏および英語文献での定義と異なっていた。そのため、書籍・雑誌の引用や翻訳の際に混乱を招いていた。しかし今回、日本足の外科学会が作成した「足関節・足部・趾の運動に関する新たな用語案」をもとに、「関節可動域表示ならびに測定法」が改訂される運びとなった。長年使用してきた用語が変更されることに対しては、臨床に従事する医療・保健・福祉の専門職、そして教育現場の方々にとって、ショッキングなことといえる。このような背景から、「第2刷」ではなく「第2版」として発行する運びとなったのである。

第1版執筆時には細心の注意を払ったつもりではあったが、やはり(?)誤植はあるもの。開き直すつもりはないが、この機会により学生目線で本文の修正・加筆をすることとした。またわずかではあるが、図表を追加した。現時点で可能な修正・加筆を時間の許す限り行ったつもりではあるが、まだまだ不備も散見することが予想される。手に取っていただいた方から、ご意見、ご指摘をいただければと思っている。

最後に、本書の編集にあたっては多くの方々のお力をいただいている。谷田惣亮先生、宇於崎孝先生、高田雄一先生、そして同僚の中俣修先生には、授業中に学生が簡単な実技を行えるように設けた「Let's Try」、臨床医学に接続するための「臨床で重要!」の執筆協力、そして本文に対する助言、アドバイスをいただき、大変感謝している。また、私の意見に耳を傾けたうえで、適切な助言をいただいた羊土社編集部の冨塚達也氏、望月恭彰氏に深謝する。

2021年12月

山崎 敦